

創立50周年記念誌

— 伝統の継承と創造 —

技と人をつないで

庭

未来へ



一般社団法人日本造園組合連合会は、ここに創立50周年を迎えることになりました。

昭和48年11月13日、全国造園業界の大きな期待を担って発足し、以来今日まで着実な歩みを続けることができましたのも、献身的に支えていただいた歴代役員、組合員の皆様、並びに関係官公庁、団体、関係者の皆様のご支援とご協力の賜物であり、心から厚く御礼申し上げます。

この50年間は激動の時代でありましたが、「仲間同志の思いやりと固い団結による友愛の精神」を基本理念に、終始一貫して技能士はもとより造園業界の評価向上と造園技法の継承と創造、これを支える人材の育成に取り組み、さらには経営基盤の強化対策など、全国各地の組合員の創意・工夫を生かし、実効ある成果をあげることができました。

記念誌では、特に直近10年間の取り組みを中心にとりあげ、おもてなしの庭、海外日本庭園再生事業、

緑化フェア等への庭園出展、技能五輪など、造園連の歩みが目で見て伝わるように写真等を豊富に使い紙面を構成しました。現代の庭づくりへの提言や、これからの仕事に生かす手がかりが散りばめられております。また造園業界に係る有識者の皆様にもご協力いただき、造園連へのメッセージを寄稿していただきました。

今日では世情、環境、教育、嗜好、経済など、50年前とは全く違う状況となっており、今後も社会構造の大きな変化が見込まれておりますが、この先を見据え、50周年を新たなスタートとし、新しい時代に即した事業の再構築、持続可能な組織運営を目指して、新時代の造園連をスタートしていきたいと思っております。造園連並びに造園業界のさらなる発展にむけて、より一層の展開に努めて参りたいと存じますので、今後とも皆様方からのご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

内海一富

一般社団法人日本造園組合連合会理事長

CONTENTS

P.01	_____	理事長あいさつ
P.02	_____	おもてなしの庭
P.04	_____	海外日本庭園再生プロジェクト
P.06	_____	日本庭園士認定制度創設
P.07	_____	全国都市緑化フェア／鳥取・浜名湖・愛知・横浜・八王子
P.08	_____	全国都市緑化フェア／山口・長野・広島・熊本・北海道
P.09	_____	世界スカウトジャンボリー・復興庭園『希望の庭』 軽トラガーデンコンテスト・世界盆栽会議
P.10	_____	全国造園技能競技大会・若年者ものづくり競技大会 技能グランプリ・技能五輪国際大会・技能五輪全国大会
P.11	_____	各界からの寄稿「創立50周年に寄せて」
P.16	_____	年表／1973年～2023年
P.20	_____	あとがき



第30回緑の環境プラン大賞 「おもてなしの庭大賞」受賞作品

【施工期間】

第1期／令和3年4月14日～17日

第2期／令和3年4月21日～24日

【施工場所】

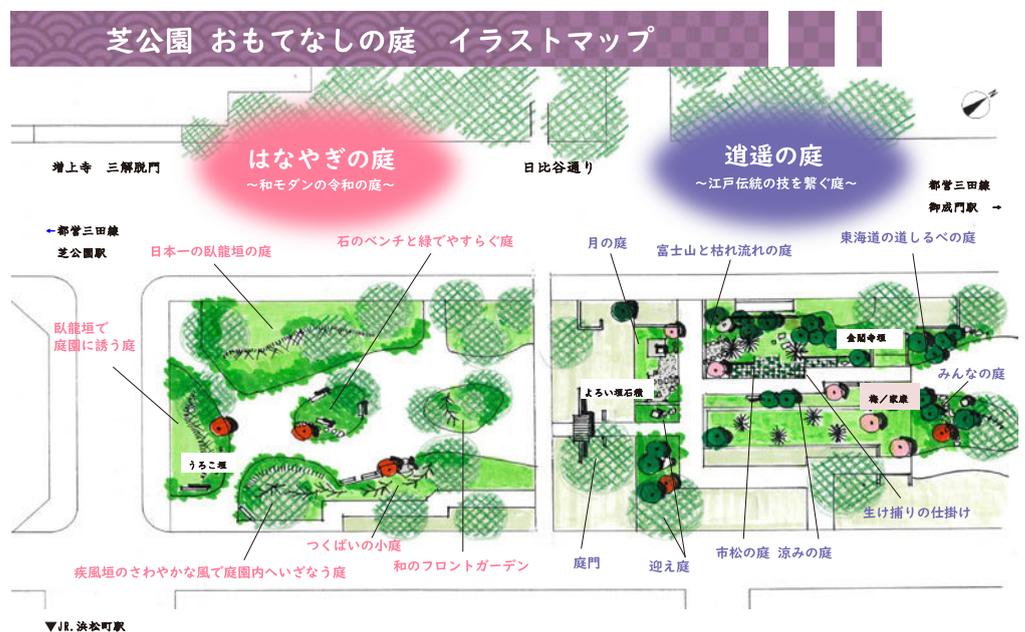
東京都立芝公園6号地・8号地(東京都港区)

【研修会参加者】

1級技能士40名

【緑の環境プラン大賞主催】

都市緑化機構、第一生命財団



おもてなしの庭

～匠の庭師が日本庭園文化を世界に発信～



龍の背がうねっているような曲線が特徴の臥龍垣



芝と敷石で市松模様を配し、和モダンの雰囲気を演出



既存の月のモニュメントに竹で蛇籠を模したインスタレーションを配置



疾風垣施工の様子



疾風垣とつくばい

海外日本庭園再生プロジェクト



ミシガン州クランプルック／ハウス&ガーデン完成した庭園



グレンデール／滝流れの石組みの完成



ハワイ・ヒロ／砂門を描いた庭師の遊び心



ナッシュビル／チークウッド日本庭園松霧園修復完成



ヒロ・リリ・ウオカラニ庭園／護岸を修復した日本庭園全景



グレンデール／日本庭園躰の修復完成



グレンデール／躰修復作業中



クランブルック／冷たい雨の中、石を据える



グレンデール／倒れていた石灯籠の組み立て作業中



クランブルック／施工中



ナッシュビル／躰の完成。竹垣は園内から切り出して対応



ナッシュビル／石組み。既存の石組みの修正と追加の石組み



ヒロ・リリ・ウオカラニ／池に入って石を据える



ナッシュビル／四ツ目垣づくりのワークショップ

グレンデール／ブランド公園内松声庵・友好園

■アメリカ・カリフォルニア州 ■2018年1月施工／参加者7名

【内容】

躰、滝石組、石積み、池護岸州浜、高木の透かし剪定、灯籠の組み立てなど



クランブルック／ハウス&ガーデンズ日本庭園

■アメリカ・ミシガン州 ■2018年10月施工／参加者6名

【内容】

滝流れの庭園を施工



ナッシュビル／チークウッド日本庭園・松霧園

■アメリカ・テネシー州 ■2019年10月施工／参加者6名

【内容】

枯山水滝石組流れ修復、州浜、砂利敷、躰、クロマツの植栽と剪定、城積み、石橋



ヒロ／リリ・ウオカラニ庭園

■アメリカ・ハワイ州 ■2022年6月施工／参加者4名

【内容】

大津波により壊された州浜護岸の修復



日本庭園士認定制度創設

平成30年度(2018年)日本庭園士認定制度創設。

日本庭園を造り、管理する知識・見識、技術・技能を持つ技能者を「日本庭園士」として認定する制度。

平成31年1月日本庭園士補認定研修開始、計4回の認定研修により、110人の日本庭園士補が認定されている。

日本庭園士/Japanese garden meister

作庭実習



1. 作庭実習3人チームで、小庭園を設計し、作庭する(2018年1月京都植物園)
2. 茶庭の作庭実習 3. 作庭実習で完成した庭園の講評

ステップアップ研修



4. ステップアップ研修で洗い出しの研修
(2018年1月都立園芸高校)
5. ステップアップ研修で石組みの研修
(2023年3月奈良県立磯城野高校)

学科講習



6. 「日本庭園の伝統と創造」尼崎博正先生
7. 「日本伝統文化と日本庭園」進士五十八先生

全国都市緑化フェア／第30回～34回

| 2013年～2017年 |

第30回全国都市緑化とっとりフェア／造園連出展庭園（庭づくり塾）



第31回全国都市緑化しずおかフェア／造園連出展庭園



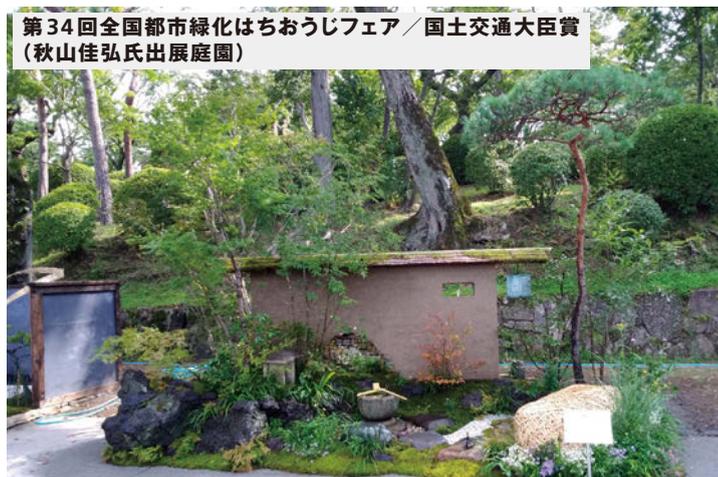
第32回全国都市緑化あいちフェア／造園連出展庭園



第33回全国都市緑化よこはまフェア／造園連出展庭園



第34回全国都市緑化はちおうじフェア／国土交通大臣賞
(秋山佳弘氏出展庭園)



全国都市緑化フェア／第35回～39回

| 2018年～2022年 |

第35回全国都市緑化やまぐちフェア／国土交通大臣賞（造園連青年部出展庭園）



第36回全国都市緑化信州フェア
女性造園技術者技能競技大会金賞作品
（島田遥・安田愛チーム）



第37回全国都市緑化ひろしまフェア／広島県支部



第38回全国都市緑化くまもとフェア
若手造園技術者競技大会金賞作品
（中野太一・浦辻知菜莉チーム）



第39回全国都市緑化北海道フェア



世界スカウトジャンボリー・復興庭園『希望の庭』 軽トラガーデンコンテスト・世界盆栽大会

| 2014年～2017年 |

復興庭園『希望の庭』／平成27年9月11日～12日 於:岩手県陸前高田市・杉の家はこね



第23回世界スカウトジャンボリー・庭づくり実演
平成27年7月30日～31日 於:山口県・きらら浜



第8回世界盆栽大会 小さな日本庭園実演作庭
平成29年4月30日 於:さいたまスーパーアリーナ



全国軽トラガーデンコンテスト



第1回金賞作品(而今)と会場風景
平成29年4月28日～29日 於:富山県・砺波チューリップ公園



第2回金賞作品(宮城県造園建設業協会青年部)と会場風景
令和元年10月12日～13日 於:宮城県・青葉山公園本丸広場

全国造園技能競技大会・若年者ものづくり競技大会 技能グランプリ・技能五輪国際大会・技能五輪全国大会

| 2013年～2022年 |

第46回技能五輪国際大会・銀メダル作品 (中野太一選手・浦辻知菜莉選手) 令和4年10月23日～28日於:エストニアフェアセンター



第3回全国造園技能競技大会・金賞作品 (KURO 髭 / 龍崎浩二氏・萩原高志氏)
平成26年10月17日～19日 於:京都府立植物園



第46回技能五輪国際大会表彰式
(左端が浦辻知菜莉選手、隣が中野太一選手)



第3回全国造園技能競技大会・会場風景



第29回技能グランプリ・金賞作品 (吉沢実氏・尾川憲司氏)
平成29年2月10日～13日 於:ポリテクセンター静岡



第12回若年者ものづくり競技大会・金賞作品 (石倉脩士氏)
平成29年8月3日～8月4日 於:名古屋市中企業振興会館
吹上ホール



第60回技能五輪全国大会・金賞作品 (高橋一漢氏)
令和4年11月4～7日 於:東京都立木場公園

創立 50 周年に寄せて

尼崎博正（京都芸術大学名誉教授）

特集千樹萬幹・造園の魅力を広げる ～コペルニクスの転回は現場技術者の手に～

『作庭記』は水戸黄門の印籠の如し。しかし、同書が古典と仰がれるのは理念を記しているからではない。当たり前のことを素直に表現しているからである。もっとも、理念とみるか当たり前のことと感ずるかは人それぞれであるが…。

では、享保20年(1735)に出版された北村授琴の『築山庭造伝(前編)』はどうだろう。江戸時代の作庭書は総じて評価が低い。その理由はともかく、北村と橋俊鋼は視点が全く異なっていることだけは確か。現場代理人と有識者といったところだろうか。それでも当たり前のことを言っているという点では共通している。

よく知られている『作庭記』はさておき、『築山庭造伝(前編)』の一節を紹介しよう。

「世伝に土何升に灰何升水何升といへるなんと相定たる古書等は大にあたらす。愚なる教なり」(「扣(タタキ)土仕様伝乃事」)。問題は水の分量を定めていること。産地やその日の天候によって土の含水量が異なるからだ。たとえば軒内のタタキは「こわく」すべしとのこと。その水加減だが、手に握った時は固まったように思えても、手を広げれば三つ四つに割れて落ちるような状態だという。まさに“手触りの感覚”の世界。

600年を隔てた二つの作庭書は奇しくも

セットで、物事を深く追求し、造園の未来を展望する際の指針を暗示しているように思える。深く掘ろうとすれば大きな穴が必要。つまり、広い視野からの思索なくして未来は見えてこない。しかし、逆もまた真なり。一点を凝視すれば、世界が、そして未来が浮かび上がってくることもありうる。

“手触りの感覚”から物事の本質を掴み取る。それは現場技術者にしかできない離れ業。

身体と頭に刻み込まれた豊かな経験からのみ発せられる「核心を見極める閃き」といってもよいだろう。ニュートンのリンゴのように、直感と仮説を疎かにするなかれ。「世界は仮説でできている」(竹内薫:『99.9%は仮説』)のだから。

このあたりに、造園界でのコペルニクスの転回の糸口があるような気がしてならない。

栗野 隆（東京農業大学教授）

戦後20世紀の造園界の巨匠の業績を伝えてゆこう

造園連が設立された50年前に名を馳せた造園家・作庭家をみなさんご存知だと思ふ。

2代松本幾次郎と4代岩本勝五郎の自然主義庭園を雑木の庭として確立した飯田十基、荒々しく地面から突き出したような石組で「永遠のモダン」を表現した重森三玲、植治の支配人を務めた後に東京で岩城ブランドを確立した岩城亘太郎、「石が動き出す」と語りながら躍動的な石組を得意とした小島佐一、飯田流の雑木の庭を現代建築にも合うようにアレンジした小形研三、「風情」を庭園に表現した中島健、秋芳洞百枚皿の如きカスケード状の滝で

作風を確立した荒木芳邦、構成要素を極限までそぎ落とした「きれいさび」の求道者・井上卓之、古代・中世・近世の庭園技法を熟知して昭和の小堀遠州と評された中根金作、そのほか、斉藤勝雄、伊藤邦衛、深谷光軌ら、多彩なタレントが活躍していたのが今から半世紀前の造園界の様相だった。

彼らは昭和をリードした造園の巨匠だった。ただし平成から令和に時代が移り変わるにつれ、彼ら造園家たちの名を聞くことが少なくなったことに一抹の寂しさを覚えるのは私だけではないはずだ。私は現在、大学で造園の教鞭を執る立場として二十

歳前後の学生と接する機会に恵まれているが、彼らの口から上記の造園家の名前や作品が聞かれなくなったことに、ある種の危機感を覚え始めている。

造園連設立50周年にあたり、私たちの役割のひとつとして、戦後20世紀の造園界の巨匠の作品を後世に残すことを掲げたい。具体的には、彼らの作品を正しく評価し、文化財にもってゆくことである。文化財保護法の適用範囲が広くなり、造成後50年を経た庭園で時代を特徴づける造形をよく遺しているものや造園文化の発展に寄与したものは登録記念物として、ゆるやかではあるが法的に保護の措置を講ずることが可能となった。まず私は、彼らの業績をしっかりと活字にして伝えてゆきたい。

五十嵐康之（国交省都市局官房審議官）

「日本の庭園」との新しい関わり合い

日本庭園は日本の自然と時代が呼応して生み出される。時代の変化に合わせて浄土式や枯山水や池泉回遊式など様々なカタチが現れ、一つの様式としてはまとめられないが、それぞれが日本庭園だと認識されている。欧州の庭園様式と比べても幅の広さは明らかで、日本の自然と人の関わり合いの多様性が見て取れる。

国土交通省では海外につくられた日本庭園の再生を、造園組合をはじめとする造園関係者や在外公館等の協力を頂きながらお手伝いをしていく。実際に修復された庭園を訪れると、海外の現地関係者が庭だけでなく、日本人の精神性や美意識にも敬意を持っていると感じ、その奥

行き深さにあらためて感銘を受けている。

現在、グリーンインフラの社会実装を進めているが、新しい国土計画にもその方針が位置づけられる。日本庭園には、流れを制御する水工学や樹林を持続的に管理する剪定技術、花卉や野菜の新品種の先行的な栽培等、国土の整備や運営につながる不易流行の叡智が見て取れる。借景や圍繞を用いた空間構成、景観手法がまちづくりに適用可能なのは言うまでもない。

国際的な気候変動と激甚化する自然災害、生物多様性の喪失や食糧問題等に対して、植物に代表される「みどり」が担う役割は大きい。その「みどり」との新しい関

わりあいは、日本庭園の温故知新から見出すことができるのではないかと考えており、人・技・場などから学ぶべきものは多い。

令和九年には、大阪花の万博以来となる最上位の国際園芸博覧会が横浜で開催される。会場に日本庭園が展示されるのではなく、会場全体が令和の時代における日本の庭園だと言われるようにしたい。会場の大宗は都市公園となることが予定されている。全国各地の都市公園にも日本庭園の思想や技術がもっと用いられても良い。

都市公園制度の始まりとされる太政官布達百五十年と日本造園組合連合会の創設五十年にあたり、あらためて日本の庭園というものを考えてみたい。

井原 縁 (奈良県立大学地域創造学部教授)

日本庭園の伝統知が導く豊かさに向けて

新型コロナ感染拡大に伴い、私たちの生活様式は大きな変化を余儀なくされました。この有事に突入して約3年が経過した今、ウィズコロナに向けた方針転換のもと、長く続いた非常事態から平時を取り戻す方向へと、さらなる変化の兆しが見え始めています。これから造園連が歩む、次の創立60周年に向けた10年間は、感染拡大前とは異なる「平時」の社会が前提となってくるでしょう。

この間、私たちは唐突に始まった、あまりにも急激な変化の波にさらされ続けてきました。このことは、多くの人々が多大な不安やストレスと隣り合わせの生活を送ってきたことを意味します。これからの新たな「平時」の社会において、このような不安やストレス

が一気に軽減されるかというところではなく、根本的に不安定で流動的な社会のなかで、一人一人が心理的不安と折り合いをつけながら生活を営んでいく、あるいは新たな生活の在り方を見出していき、そんな日々が当面は続くのではないかと推察されます。

このような状況下、人々の生活のすぐ傍で、心に潤いや豊かさをもたらす屋外環境を造形・創出・維持継承する「造園」が果たす役割は、非常に大きいと考えられます。造園は、時代ごとの社会的ニーズに呼応して多様化し、現在その対象範囲は非常に広範なものとなっています。この順応性・柔軟性は、本質的に幅広い領域に適用し得る特性を有している造園分野・業界の特性ともいえます。造園学を専攻した私が、観光・まちづくりを旨とする大学で教育・研究に従事しているのもその特性ゆえです。た

だ、その特性と同時に、激動の時代だからこそ、ここからはむしろ造園の「揺るがなさ」が大事になってくるのではないかと強く感じています。

ここでいう「揺るがなさ」とは、造園の原点である庭づくりの精神、日本庭園の「伝統知」です。様式等の違いを超え、基底に脈々と受け継がれてきた伝統知—自然と人間に対する深い理解、立地環境の読み解き、全体の景との関係性のなかで個々の要素を捉える眼等—は、庭園はもちろん、あらゆる屋外環境を、人々の生活に不可欠な豊かで潤いのある場所へと導いていく指針となり得るものです。揺るがない伝統知を軸とした造園連「ジャパン庭園マイスターズ」の皆さんと共に、豊かで潤いのある環境づくりに向けて、私自身も務めていきたい、歩んでいきたいと思っています。

内山貞文 (ポर्टランド日本庭園 チーフ・キュレーター)

文化外交を担う日本庭園

昨年末、ついにアメリカでの生活が日本にいた時間より長くなった。庭作りの家系に生まれ育ったにも関わらず、日本庭園の何たるかも知らず、その価値も十分認めることなしに日本を離れた私が、今は、その日本庭園に「活かされている」。皮肉なことに、海外で自らの文化に開眼させられ、教えられてきた。同時に、遠くから日本を、そしてその文化としての日本庭園を客観的に見て、考えることが出来たことを幸運に思う。

世界中には沢山の日本庭園があり、また今も作り続けられている。ポर्टランド日本庭園(米国オレゴン州)もそうした「海外の日本庭園」の一つであり、共に育ってきた私のホームグラウンドでもある。私はこの庭園を「文化・芸術」としてのみならず、人々が

集い、様々な感情や思いを抱えながらも穏やかに生きるための学びができる「場」として育てようとしている。抽象的な言い方ではあるが、日本庭園にはそういう「場」としての良さと意味あいがある。

そういった「場」を美しい形で海外に紹介・共有できるのは素晴らしい。2017年に始まった「海外日本庭園再生プロジェクト」の最前線で活躍された造園連の皆様も、そのような思いを抱かれたことかと思う。

ミシガン州のデトロイトにある克蘭ブルック総合学園(初等科から大学院)では、100年前に着工され、未完成のままであった日本式庭園が、手付かずの状態に残されていた。2018年10月、近江庭園の寺下弘親方を中心とした造園連チームの修理・改

修によって、その庭園は永い眠りからめざましく甦った。翌2019年の10月には、新しいメンバー構成で、同じく寺下親方の指導の下、テネシー州ナッシュビルのチークウッド荘園の日本庭園の改修がなされた。1979年作の丘を背景に作られた庭園は、大掛かりな化粧直しが施され、再び市民のもとに開放された。こうした活動の成果は、文化交流や技術移転にとどまらない。文化や美意識・価値観を(庭園という)形にして紹介する過程には、自らの文化を振り返り、相手の文化を知る機会が潜在する。そこでは双方向の価値判断と理解が求められ、その姿勢と行為は、おのずから「文化交流」の延長線上にある「文化外交」へと繋がっていく。これは海外で日本庭園に携わってきたからこそ実感できたことであり、今後も日本庭園が文化外交に果たす役割について発信を続けていきたい。

大北 望 (株式会社大北美松園)

建築と庭と時代

何時からだろう。以前、大工の棟梁と植木屋の親方は対等の立場で意見交換を重ね建築と庭が一体化した美しい景観を両者のコラボで作ってきた経緯がある。それが何時の頃か、庭仕事を建設会社、工務店から請け負う様になり、その結果、建築が優位性を持ち造園が建築の下請けに成り下がってしまった傾向が見受けられる。建築の関連産業の屋根屋や左官屋、建具屋などは下請け業者だが造園だけは昔から別格、その立場は50/50のいい関係にあり、互いのプライドをかけ対等の立場で良い仕事をしてきた。造園は生き物(植物)を扱う職種であり、その種類の多さ

や成長度合いは専門性や特殊性を含み、又、自然という広域性から建築の様な形容の明快さはなく、何となく割り切れないファジーな部分が多く、建築にとって難解な面がある。だから両者は人工と自然とに二分化されてきたのでしょう。基本的に造園は建築物が存在してこそ成立する。今日、下請けに甘んずる構図は時代の流れや社会構造上の変化で起った一面もあるが、一方で造園側が建築側に対し、発言力、創造力、提案力、対応力の発信の弱さ故の結果だと感じる。現代の建築は材料、工法、意匠等々、日進月歩、それに対応すべく、日々、努力をしている。それに対し、造園の

世界は伝統文化という旗印の下、旧態依然の形式や概念に囚われ、それに胡坐をかき、現代社会の潮流や要求をよそ事のように、世に対しても建築に対しても何もアピールしてこなかった結果、大きく立ち遅れてしまった。

今、日本の社会で「墓じまい」に並行して「庭じまい」が急速に始まっている。この「庭じまい」の一因は、紛れもなく旧態依然の庭の拒否の表れであり、業界にとって、こんな淋しい現象はない。時代が大きく変化している今、再び建築と造園が対等の立場に立ち、協働出来る環境を再構築する事が互いに良い仕事をする上で最も好ましい形だと思う。造園界の地位向上と建築を含めた美しい景観創造の為に…。

進士五十八（東京農業大学名誉教授・元学長／福井県立大学名誉教授・前学長）

造園は、平和産業！

プーチンのウクライナ侵攻は多くの人命を奪い、食料エネルギー経済と世界中の人々の生活をあつという間にどん底に落とす戦争のリアルを私たち自身に実感させる。そんな中ポर्टランド・ジャパニーズガーデンのステイブらが「ピース・シンポジウム」を企画。日本では2022年鳥居坂の植治作庭の国際文化会館で開催、私もパネリストを務め私自身はずっと“平和”と“庭園”は同義と確信してきたと話した。

ウクライナ侵攻直後、福井県立大の学位授与式学長式辞で私は、私自身と縁のあった『昭和史』の著者半藤一利、『ほくは戦争は大きい』の漫画家やなせたかし、県立大客員教授をお願いした伊藤忠商事元社長、元中国大使の丹羽宇一郎著『戦争の大問題』の3人にふれた。丹羽のはエコノミストならではの平和論で、戦史に残る戦争の収支分析で投入戦費と戦

争で得た富を比較、儲った戦争はひとつもない！ことを結論している。

次は私の経験談。2024年が百周年の東京農大造園学科だが、私が造園学科60年史の編集を担当して気づいたのは「造園は平和産業だ」ということだ。関東大震災後の帝都復興には造園技術者が不可欠と強く思った上原敬二は私財を投げ打ち「東京高等造園学校」を創立。評価も高く優秀な学生が集まり隆盛を極めたが、昭和初期戦局が悪化すると高等造園卒業生など戦時下に不用だと前線に送られ死ぬ運命に。造園学校は廃校の危機、井下清の斡旋で農大専門部に移管されたものの定員割れは続く。後平和日本を追い風に元気になるのだが、造園家としての私はこの時「造園は平和産業」を肝に銘じたのだ。

ピースシンポで私は、米軍接收解除後の平沼亮三横浜市長が米国諸都市に

ピース・ランタン(平和の灯籠)を寄贈(1957)したエピソードを紹介した。雪見灯籠の中台に英語でCasting the Light of Everlasting Peace(平和の光永遠に)が彫られている。全国都市緑化フェア・横浜(2017)に際し、その歴史を横浜市民や全国民に知らせようと横浜スタジアムの横に「彼我庭園」(もともと横浜公園は明治初期国際交流の意味を込め彼我公園と名付けられた)を修景整備、ポर्टランド日本庭園(内山貞文の協力)ピース・ランタンの里帰りを提案した心もアピールした。

私が考える現代的日本庭園の意義は、①日本文化のシンボルで平和の切り札、②浄土の庭に象徴されるように平和の園がテーマであり続け、③わが国造園技術の基盤で、④生物多様性・地域と連続するエコロジー環境景観共生のモデル、⑤グローバル観光の必要条件でランドスケープ・デザイン・シティ社会づくりに寄与するもの。

造園人は以上をいつも考えて、行動したいと願っている。

(『都市緑化技術』120号、2022-12、拙稿参照)

鈴木 誠（東京農業大学名誉教授・東京農業大学グリーンアカデミー校長）

日本の庭園文化と日本庭園博物館

東京の植木屋、親方三千人・職人三万人。明治26年(1893)頃、今から130年前の話である。「庭作り共が協議の上組合を組織しようとしたが、頭数が多いため容易にまとまらず、今日でも仲間内に一定の規約もなく、各自勝手に働いている始末である。」「諸藝一流 庭作りの名人 松本幾次郎」、1903年7月新聞記事)

それから80年後の昭和48年(1973)、日本全国にまたがる(社)日本造園組合連合会が誕生した。この頃、(社)日本造園建設業協会(1971)(社)日本植木協会(1973)、(社)道路緑化保全協会(1973、2009解散)、(財)日本緑化センター(1973)等が発足し、造園技能士(1973)、造園施工管理技士(1975)が制定され造園界充実のス

タート期だった。

さらにその50年前頃、大正13年(1924)東京高等造園学校(現東京農業大学造園科学科)、翌年には(社)日本造園学会が設立され造園学の自立が始まる。両者の創設に関わった上原敬二博士は、一つの職能(造園家)が社会認知を受けるには、専門教育・専門学会・職能組織の三つが不可欠だと考えていた。

さて近年、日本庭園の情報メディア「おにわさん」(イトウマサトシ、2016)というSNS(Instagram / Twitter / Facebook)が評判でフォロワー数約8.5万人という。YouTubeで日本庭園の動画発信する「Japanese Garden TV」(Matsunaga@、2018)のチャンネル登録者数は10.6万人。また、画像投稿サイト、インスタグラムの

「japanese gardens」のフォロワー14.8万人、投稿約2千件。同「#japanesegarden」では投稿117.3万件を数える。Webサイト「海外の日本庭園」(東京農業大学国際日本庭園研究センター、2012)には公開日本庭園が653件、先の「おにわさん」には国内の日本庭園1878件が紹介される。

日本の庭は千年以上の歴史をもち世界に広がりを見せる。蓄積された「日本庭園」[Japanese Gardens]情報も、ファンも増している。そこで、教育・学会・組織の三つにもう一つ、その職能領域が文化として社会認知されるために、専門博物館が必要だ。日本庭園に関する古今東西あらゆる情報をアーカイブし展示するミュージアムである。日本庭園を世界遺産として考えるにも、国際社会と情報共有し、文化的未来継承を目指す活動拠点「日本庭園博物館」の設立が待たれる。

高岡伸夫（株式会社タカショー 代表取締役社長）

不易流行の考えのもと、庭技術を生かし時代に向かう今こそチャンス

日本は、100年に一度の大きな時代の変わり目に来ています。かつてのモノづくりや人口減やGDPなど大きく世界の中で衰退しているのではとされています。東京一極集中からもう一度地方を見直して、政府が打ち出したデジタル田園都市国家構想が打ち出されました。

「スーパーシティ」、「MaaS」、「地域経済循環型」、「防災レジリエンス」、「スマートヘルスケア」、「スマートホーム」などを中心に、地域社会からもう一度見直し、DXを組み合わせた投資をし、スタートアップ企業を作り活力ある日本を作ろうと大きく動き出しています。またPFIなど中心に地域行政から民間への委託運営とか、ここでも大きな

動きをスタートし活性化しようとしています。

それに基づいてのSDGs、ナショナルレジリエンスからの「医療介護レジリエンス」と「住宅コミュニティのレジリエンス」、等の国家のこれからの方向性を打ち出し、大きなビジネスチャンスがおとずれしています。想像的技術、創作的能力ほか、日本の庭園・庭づくり、緑を配置するバイオフィリックデザインなど、造園やランドスケープの必要性が求められています。

DX(デジタルトランスフォーメーション)やGX(脱炭素化グリーントランスフォーメーション)の時代の技術や考えを取り込み、皆が一緒になって、環境や健康や文化を産業化し、緑を中心とした幸せな暮らしを作っ

ていけないといけません。こんな町に住みたいという「花と緑のまちづくり推進協議会」を推進し、日頃の暮らしの中で自らの健康を作る家と庭とまちの仕組みやコミュニティ等、50周年を超えた世界に誇れる日本造園連合会の皆様や各団体とともに、変えてはいけない伝統の継承と創造等の「不易」の部分と、DX、AR、VR他時代の技術や考え価値の「流行」をもう一度見直し、学び、取り込み、四季の美しく素晴らしい国日本を、緑を中心として全力で取り組みしていきたいと考えております。

この機会、このチャンスの時、ぜひガーデンを考える会や色んな会がともに知恵と知識と汗を合わせ、庭緑の方向、技術技能、人材の育成、地球環境に果たす造園の役割をはたしていければと念じております。

竹内智子（千葉大学大学院園芸学研究院准教授）

「感じる・取り込む・伝える」公共空間・都市の風景をつくる

2021年5月、東京都立芝公園の一部に東京オリンピック・パラリンピック時に「おもてなしの庭」として「はなやぎの庭」と「逍遙の庭」が作庭されました。日本庭園の伝統の技と文化を魅せる二つの庭は、本連合会が緑の環境プラン大賞を受賞し設計・施工されました。塀にカラー鉄筋が使われ、東京タワーと増上寺の三解脱門を背景として取り込み、バリアフリーに配慮した小視さがあります。時代を捉えた自由で斬新な発想、身近な素材を美しく見えるよう上手く使い、プロセスも楽しむ様子に、庭師はアーティストであり、デザイナーでもあると感じました。

ここから浜松町駅方面に歩くと、江戸時代に作庭された旧芝離宮恩賜庭園があり

ます。2022年4月、これを見下ろす歩行者デッキが完成、庭園は多くの人々に上から見られるようになりました。新しいデッキ上から見ると、増上寺の大門・三解脱門、東京タワー、東京湾とレインボーブリッジ、首都高速道路、新幹線、モノレール、ゆりかもめ。江戸時代から現代までの風景が一気に繋がります。現在、約50年前に建てられた世界貿易センタービルが建て替えのため取り壊され、当時新幹線用地として庭園から削られた土地が歩行者専用道として整備されています。周辺は50年ごとに大きく変わりますが、芝公園や旧芝離宮恩賜庭園は変わらずそこにあり、都市の風景を構成しています。

次の50年は、庭園の遺構が見つかった土地を活かして潮入りの池を復活させるなど、庭園に合わせて周辺の街を変えていく「文化財庭園都市」の時代にしたいです。

2020年新型コロナウイルスパンデミック以降、時代は変わりました。人々は身近な緑に癒しを求めています。造園家の役割は、環境の変化を感じ、それをデザインに取り込み、空間として伝える、非常に大きなものになっています。

今一番必要なことは、造園家一人一人が直接外に向けて発信することです。皆さんが生み出す日本らしく美しい公共空間のデザインが、これからの都市をつくり、時代を経て風景を繋いでいきます。まず次の10年、多くの人が庭と共にある楽しさ・美しさを感じられるよう、情報発信し、公共空間にもっと浸透していく時代にしていきたいです。

龍居竹之介（日本庭園協会名誉会長）

上原敬二先生と造園連半世紀を祝う

上原敬二先生！お喜び下さい。先生が日本の造園界の結束と地位向上を推進する新原動力として応援された造園連こと一般社団法人日本造園組合連合会が、着実な業績を重ねて歩み続けられた結果、令和5年の今年、創立50周年を迎える快挙を果されましたよ。

先生は造園人も腰を据えて物事を学ぶ大切さ、視野の広いものの見方の必要性など、生来のご主張を造園連でもめざすべく造園アカデミーなる学びの場もお生み下さいましたね。

代々のリーダーがこの教えを守り、老若を問わず会員たちに学びの大切さを伝え続けられたことも半世紀の大成果だと存じています。先生、本当にありがとうございました。

しかし私が最近不安に感じているのは、

国全体、社会全体が、先生はじめ私たち造園関係者が大切な宝物と考えてきた「緑の力」を無神経に軽視する動きをチラつかせていることに対してです。そしてそれは緑に緑の深い農学、林学などの学問の存在を筆頭に、現場造園社会全体まで疎外している感じなのです。

人で充満する都市は再開発の名目で緑ごと宅地を高層住宅に変貌させるやら、人々の憩いの場であるべき静寂な公園は、経済活性化の看板のもとイベント優先の広場拡充で緑を中心には考えなくなって行きます。

先生の恩師・本多静六先生のご苦心の作であり、都市公園の草分けの日比谷公園も、その動きの中でイベント会場色を強調した姿への改造がきまったとか。また先生ご自身が研究を重ねられ育てられた明治神宮外苑のあの美しいイチョウ並木を中心にした都心の比類なき緑の景観美の効果も、再開発の影響で失われるのではと、都民に案じ

られております。

中国の「大学」という古い本に「修身齊家 治國平天下（天下を治めるにはまず自分の身を修め次に家庭を平和に、次に国を治め、次に天下を治める順序に従うべし）」とありますが、私はこれを「人の暮らし周辺の緑をまず大事にし、順にひろげ国全体の緑を大事にすれば国は災害も受けず平和な世となる」をいかえておりますが、先生いかがですか。

その意味で先生から造園アカデミーを通じ物の考え方や、造園の力で緑を生かす大切さを教えられ、次々の世代に伝えられてきた半世紀にわたる造園連会員の皆さんの英智が、来るべき創立60周年に向け発揮されんことを、そして腰を据えてのご発展を、心からお祈りいたします。最後に改めましてもう一度造園連さん創立50周年、本当におめでとうござります。永遠なれ造園連！

戸田芳樹（株式会社戸田芳樹風景計画 代表取締役）

造園人の気概

造園人の基本は土の上に天に向かって立っていることと私は思う。そして、地域の風土に寄り添いながら、その社会の構成員のひとりとして日々活動することが生きている証だと考える。つまり、造園人は親密に土地と人々に接するのが本来の姿で、その対極にグローバリズムが存在しているといえる。世界がグローバリズム一辺倒で進む中、ウクライナの戦争、コロナ禍と世界が不規則な状態に陥った今、ローカルの意味がもう一度見直されている。この2つの言葉を合わせた「グローカル」も一時もはやされ「グローバルに思考し、ローカルに行動する」、便利なメッセージであった

が持続力がなかった。現代社会の動向に翻弄されず、ローカル第一に徹する活動を先ずすべきだと私は考える。

造園会社はおおむね社有地と運搬用のトラックや重機を保有し、さらに植物を巧みに扱う美的センスにあふれた人材を豊富に揃えている。現代の社会問題を解決、ソリューションする力を持っているのが造園人だと認識したい。多能工としての造園人がやるべきことは、まず植物の知識を生かして地域の環境を守り、さらに子供たちの環境教育に携わること。次に庭園や園芸のデザインと技術を用いてコミュニティの核となる美しい場をつくること。そして、いざと

いう時の防災活動への参加や、地域に伝わる文化財の保全や普及の役割も重要だ。これだけのことが出来る職種が他にあるだろうか？造園人はもっと自信と誇りを持ち、社会に対してアピールすべきである。

開かれた心を持つ人に自然と人材が集まることは経験済みである。ローカルな活動で地域の風土を生かした価値づくりを行い、社会の仕組みを支える地域コミュニティを構築すれば、いずれグローバルな社会に支持されるであろう。専門分野だけに留まらず他の産業とのコラボレーションも積極的にやりたいものだ。造園人の発想で和菓子やビールの世界を巻き込み新製品をつくり出している造園人の友は、たくましく輝き続ける存在といえる。

平賀達也（株式会社ランドスケープ・プラス 代表取締役）

伝統と革新のその先にある風景

ランドスケープアーキテクチャーの根源ともいえる日本庭園は、地域の自然と呼応することで地震や疫病などの災禍を抑制する生命維持基盤であったはずだ。なぜならば、封建社会につくられた京都や江戸の庭園がいまに残る理由とは、様々な災いから人命を守るための知恵と工夫が作庭の根幹に宿っているからだ。安全にそして快適に暮らせること。この普遍的命題をまち全体でプランニングし、庭園と建物が一体となって最適解を読み解いた結果のその先に、庭園都市と称された京都や江戸の風景があったことをコロナ禍に生きる我々は再認識する必要がある。気候変動や社

会変容が著しく顕在化するいま、革新的な思想や最先端のテクノロジーによって、地域の安全性や快適性を持続させる基盤としての庭園文化を日本全体に復興すべき時代が到来しているのだ。

私が所属するランドスケープアーキテクト連盟は、2023年11月に東京で国際会議を開催する。国内外の人々と有意義な議論を行うため「Living with Disasters / 自然とともに生きていく」というテーマを掲げ、このテーマを深掘りするために3つの目標を設定した。1つ目は「Green Infrastructure / 自然を生かした社会的共通資本の整備」、2つ目は「Well-being / 自然とともに暮らす

幸せな生き方の探究」、そして3つ目は「Landscape Culture / 地域の自然に根差した文化と歴史の継承」である。都市再生の新たな切り札となるグリーンインフラの思想も、最先端の医療テクノロジーを実装したウェルビーングな社会も、地域の自然に根差した文化や歴史が目標の根幹にない限り、自然とともに生きていくための生命維持基盤にはなり得ないというのが私の見解である。なぜならば、革新的な思想や最先端のテクノロジーは伝統的な意匠や普遍性のある技術にこそ宿ると信じているからだ。次の50年を見据えて、私たちランドスケープアーキテクト連盟も伝統と革新のその先にある風景を、日本造園組合連合会の皆さまとともに築き上げたいと願っている。

吉谷桂子（ガーデンデザイナー）

持続可能な都市のみどりを進化させるプロジェクト

新しい発想で花壇デザインを競うコンテスト、第一回東京パーク・ガーデン・アワードが、都立代々木公園で始まった。コンテストの特徴は「持続可能なロングライフ、ローメンテナンス」、宿根草を中心にエコロジカルな植栽システムを構成する「植栽デザイン」にある。これまでの公園花壇は一年草を中心に、年2回の植え替えが一般的だったが、今回は宿根草中心に植え替えなしの花壇が前提だ。故に、その品種選びやデザイン配置（宿根草のコロニー形成）が鍵になるのだが、それを、ナチュラルスティック・ガーデン、あるいは、新・宿根草主義(new perennial movement)、その発祥起源から

ダッチ・ムーブメント(オランダ運動)と呼び、ランドスケープデザインの分野でも注目を集めている。20世紀終盤から顕著になった温暖化の影響、広大な屋敷の庭師不足と予算削減、現代の庭に起こり得るネガティブな問題の解決と同時に、生物多様性、無農薬・無化学肥料、人々の自然への希求や現代建築との植栽デザインの相性やトレンド性も関係し、21世紀のガーデンデザインとして、欧米の公園から個人邸にまで広がっている。その胎動は私の7年間の在英中90年代に始まっていたが、日本でも今ようやく本格始動の実感がある。今年は、厳しい審査を通過した5名のデザイナー作品

と、私がデザインするモデルガーデンが最初の夏を迎える。持続の可能性を探るコンテストは、春、夏、秋に3度の審査があり、植物の特性を捉えた適地適草、植物の季節別の魅力や耐久性を問う内容になるが、ローメンテナンスも審査対象。宿根草は本来、植栽から2～3年が経たないと本領発揮といえないが、ここで大切なのは、未来に向かうプロセス(あるいはシーズン)への挑戦だ。第一回東京パーク・ガーデン・アワードの会場は、代々木公園原宿門に入って右手前方。新たな時代への前例のない挑戦でもあり、試行錯誤もあるが、今後は、未来に向かう造園や植物の可能性に期待をしつつ、見守っただけだと願っている。

涌井史郎・雅之（東京都市大学特別教授）

ある偉人の造園連評

先ずもって(一社)日本造園組合連合会創立50周年に深甚の祝意を捧げる。筆者は、創立以来貴団体と深く交流を重ねてきた立場から、他団体と一味違う個性を見て取ることが出来る。僭越ながら、一言でいえば「同じ釜の飯」の仲とでも云う表現が的確かも知れない。

法人とはいえ、個業に近い規模の組合員。全国に散らばる構成員は規模も生業のありようも、造園同業という言葉以外は多様で多彩。不可思議なことに、それであるながら種の強固な団結力がある。それは同業仲間という共感。多彩な情報提供を怠らぬこの団体の組織的ガバナンス。

そしてこの団体であればこそとでもいうべき、団体職員の特殊なバイディング能力の高さがそうした独特の個性をこの団体に併せ持たせているからに他ならないとみている。こうした見方は、筆者に留まらない。文字にするのは初めてであるが、濃密な記憶として残る、ある偉人が漏らしたこの団体への評論をこの機会にご紹介しよう。

およそ40年前、30代後半の筆者は、東急グループ総帥の五島昇氏から命を受け笹川良一氏の下に使いに出向いた。拝眉し用務が終わった折、自分でもそうした言葉を口に出すなどとは考えてもいなかったの

に、思わず「先生。失礼ながら私は五島の傍らに居ながらも本業は造園です」先生は何故造園連、そして日消協(日本消防協会)にご関心があるのでしょうか?と聞いてしまった。笹川氏は、その問いに一瞬あの大きな目でいかにも睥睨するかのような眼光で、次いでいたずらっぽい柔和な表情に変わり「面白い事を聞く」そんな質問は初めて。若いというのはいいな「教えてやる。火消しと庭師は人を裏切らない」しかも日本全国に居るから力になる」。

表裏の政治の局面に多大な影響力を有する立場からの側面であろうが、「人を裏切らぬ」という、国内外の魑魅魍魎と闘ってきた氏の言葉には、今に至るまで大いなる共感が消えていない。

創立から創立40周年年表

| 1973年～2012年 |

1973年11月／日本造園組合連合会設立
 1974年 6月／社団法人日本造園組合連合会設立総会
 1975年 3月／造園連新聞第三種郵便物許可
 5月／造園連マーク制定
 1976年10月／日本造園アカデミー会議設立
 1977年 3月／第1回造園感謝祭開催
 1978年 8月／第1回造園教育シンポジウム開催
 10月／第1回造園コンクール全国大会、庭造り競技大会開催
 1979年 8月／造園連青年部設立総会
 1981年12月／建設業経理事務士認定講習会開始
 1982年 7月／長崎大水害被災組合員へ義援金を贈呈
 1983年11月／組合員実態調査
 1986年 5月／第1回庭園設計表現コンクール入賞者決定
 1987年 9月／雇用改善全国団体助成金(第1種)の認定
 1988年 5月／創立15周年式典、記念誌としてコラムをまとめた「千樹萬幹」発行
 1989年 6月／講談社より「庭師の知恵袋」発行、園芸図書のベストセラーとなる。
 1990年 1月／大阪花の万博出展研修会
 9月／花の万博出展庭園「野点も楽しめる日本の庭」がコンテストにおいて、名誉賞受賞
 1991年 7月／雲仙普賢岳噴火による被災者の義援金を長崎県支部へ贈呈
 1994年10月／「造園技法ビデオ第Ⅰ期3巻」完成
 1995年 2月／阪神・淡路大震災の被災者への義援金を寄託
 3月／「造園技法ビデオ第Ⅱ期3巻」完成
 1996年 1月／請負制普及に向けての講習会
 1997年 4月／専門工事業者安全管理活動等促進事業の対象業種に
 1998年 7月／創立25周年を記念し、組合員名簿を刊行
 1999年 1月／基幹技能者認定研修会開始
 10月／技能五輪全国大会で造園職種創設
 11月／技能五輪国際大会造園職種へ初参加
 2000年 1月／造園連ホームページ開設
 2001年 8月／造園ビデオ「庭づくりの基本と応用」発行
 2002年 1月／セットメニュー講習会開始 継続して実施
 2003年 4月／初めての「庭の日」全国各地で活動
 5月／創立30周年記念式典、「千樹萬幹伝統の継承と創造」発行
 11月／浜名湖花博出展作庭研修会
 ◎造園技能検定功労団体として造園連が厚生労働大臣賞受賞

2004年 1月／造園連ホームページで全国の組合員名簿を公開
 10月／浜名湖花博において、出展庭園「家族が集うやすらぎの庭」が最高賞のパシフィックフローラ大賞受賞、他コンテストにおいて受賞多数。
 造園連事務所が神田小川町マツシタビル7階に移転
 12月／新潟中越地震による救援見舞金を新潟県支部に贈呈
 2005年10月／小庭園プラン集Ⅰを発行
 2006年10月／緑の効用パンフレット「緑のチカラ」を発行
 11月／造園連新聞が1000号
 2007年10月／高齢社会における庭づくり提案のヒントをまとめた「元気が出る庭」パンフレット発行
 11月／技能五輪国際大会静岡県沼津市で開催、日本代表初の金メダル、技能展示館に庭園と竹垣を出展
 2008年 7月／登録造園基幹技能者が新制度に移行、経営事項審査制度で評価
 2009年 4月／厚生労働省「ものづくり立国推進事業」企画競争で受託以後7年間事業を行う
 8月／造園連愛称「ジャパン庭園マイスターズ」登録商標
 2010年 2月／安全標語「危険の芽、予知して摘み取る庭のプロ」制定
 3月／造園連ホームページに技能士活用状況をアップ
 9月／庭園アドバイザー認定研修会初めて山口県で開催
 2011年 2月／造園系の先生対象の造園初級技能研修会開催、翌年からは造園実習指導力向上研修会として継続
 3月／第1回全国造園技能競技大会を山口県で開催
 東日本大震災発生 組合員青年部が復興支援活動
 4月／東日本大震災による被災組合員へのお見舞金を東北ブロックへ贈呈
 造園連イメージキャラクター「庭丸」に決定
 9月／女性技能者育成に向けた技能向上研修会
 2012年 3月／宮城県の仮設住宅に庭を寄贈
 ◎「人力による運搬組み立て工法の手引」「造園工具ガイドブック」発行
 9月／「技を生かす庭づくり塾」福島県で開催、以後全国15箇所開催
 10月／第2回全国造園技能競技大会を長野県で開催



1978年の造園コンクール



2004年浜名湖花博

創立40周年から創立50周年年表

| 2013年～2023年3月 |

■ 2013年(平成25年)

- 1月／庭づくり塾、佐賀県、広島県で開催
- 2月／「造園実習指導力向上研修会」(東京・京都・山口の3会場)で開催
◎第37回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、四国ブロック4支部が「アカマツ」を献木。作家のC.W.ニコル氏が特別講演
- 3月／次世代の指導者を養成する「技能検定指導員養成講習会」を52名の参加で開催
◎労働災害防止と安全活動に活用するヒヤリ・ハット事例集を作成
◎ひろしま菓子博庭づくり塾、広島県で開催
◎透かし剪定研修会(東京・山口の2会場)で開催
◎庭の日のPRする車両用ステッカーを作成、全組合員に配布
◎全国造園技能競技大会報告書を作成
◎庭の日の広報として、女性雑誌と園芸雑誌に広告を掲載
- 4月／一般社団法人へ移行
- 5月／造園連40周年記念誌「伝統の継承と創造 技と人をつないで庭～未来へ」完成。組合員全員に配布
◎第40回通常総会、創立40周年記念式典が320名の参加で開催
新理事長に宇田川辰彦氏
- 6月／庭づくり塾、埼玉県で開催
◎技能検定1級課題改定、新しい課題に対応したテキスト・DVDを製作、販売を開始
- 7月／技能五輪国際大会、ドイツ・ライプツィヒで開催。鈴木・湯本組が出場
◎17名の参加で、ドイツへ海外造園事情視察研修
- 8月／「造園実習指導力向上研修会技能五輪コース」(東京都)で開催
- 9月／造園シンポジウム(会場／東京都港区)。テーマは「ひとを呼ぶ商(小)空間の緑を考える～街の「cawaii」を探しに行こう～」
◎庭づくり塾、鳥取県(全国都市緑化とっとりフェア会場)で開催
- 10月／高齢者の雇用改善のための「造園工事業高齢者雇用推進の手引き」を発行し、ブロック会議でセミナーを開催
- 11月／庭づくり塾、大阪府で開催
◎第51回技能五輪全国大会、東京都で44名が参加

■ 2014年(平成26年)

- 1月／庭づくり塾、愛媛県で開催
◎透かし剪定研修会(東京都)で開催
- 2月／「造園実習指導力向上研修会」(東京・三重の2会場)で開催
◎第38回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、東京ブロックが「アカマツ」を献木。
神宮技師野崎芳郎氏が式年遷宮について特別講演
- 3月／全国都市緑化しずおかフェア庭づくり研修会開催
◎透かし剪定研修会(山口県)で開催
◎「熟練技能者の剪定技能の記録」(東京・石川・京都)をDVD化
- 4月／庭の日の市民向け公開講座を全国3会場(福岡・東京・仙台)で開催
◎全国都市緑化しずおかフェア庭園出展、テーマは「季を彩る暮らしの庭～水と緑と花といのちのシンフォニー～」金賞受賞
- 5月／キッズ向け、造園の仕事リーフレットを作成、ホームページにキッズコーナー設置

- 6月／庭づくり塾、東京都で開催
- 8月／こども霞が関見学デーイベントに初めて参加
- 9月／造園シンポジウム(会場／神奈川県茅ヶ崎市)。テーマは「街並み、建築物と造園空間の色(カラーコーディネート)を考える」
◎庭づくり塾を青森県で開催
- 10月／庭づくり塾を福井県で開催
◎第3回全国造園技能競技大会を京都市・京都府立植物園で開催、16組32名が参加、「庭のある暮らし2014」をテーマに作庭し、まさしく技の数だけ庭がある。
◎第三者賠償責任保険「グリーンガード保険」制度を創設
- 11月／第52回技能五輪全国大会、愛知県で25組50人が参加
- 12月／長年維持管理を造園工事として認めてもらうよう要望してきたが、造園工事の例示が改訂され「緑地育成工事」として適用される

■ 2015年(平成27年)

- 1月／技能検定指導員養成研修会開催参加者30名
◎造園人マナー集作成
- 2月／「造園実習指導力向上研修会」(東京・三重・山口の3会場)で開催
◎第39回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、中国ブロックが「クロマツ」を献木。経営合理化協会理事長牟田學氏が特別講演
- 3月／発注機関向け、造園技能士の紹介パンフレット作成
◎現場の女性技能者研修会開催
◎初級の技能の手引き作成、指導員養成研修会開催
- 4月／庭の日の市民向け公開講座を全国2会場(石川・京都)で開催
- 8月／造園シンポジウム(会場／埼玉県さいたま市)。テーマは「ガーデンシティへの道を探る～Bonsaiと庭の駅による街づくり」
◎全国都市緑化愛知フェア出展庭づくり研修会「家族みんなの庭物語」
◎世界スカウトジャンボリー隊龍垣の実演、日本庭園について英語版パンフレット作成(山口県きらら浜)
◎技能五輪国際大会、ブラジル・サンパウロ市で開催、石見・神藤組10位
- 9月／東日本大震災復興記念庭園「希望の庭」作庭研修会(岩手県陸前高田市)
- 10月／庭づくり塾、大分県で開催
- 12月／第53回技能五輪全国大会、東京都で38名が参加

■ 2016年(平成28年)

- 1月／女性造園技能者育成のための技術・情報交流会(東京都立園芸高校)
- 2月／第40回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、北陸ブロックが「アカマツ」を献木。小説家朝井まかて氏が特別講演
◎「造園実習指導力向上研修会」(東京・三重の2会場)で開催
- 3月／高校向け「造園のしごとハンドブック」作成、農業高校などへ配布
- 4月／庭の日公開講座2会場で開催(東京・愛媛)
- 5月／4月に発生した熊本地震に対して、全国組合員からの救援見舞金を熊本県支部に贈呈
- 9月／造園シンポジウム(会場／千葉県船橋市)。テーマは「魅せられる庭・公園・まち並みづくり～故郷の風景を守り育てる」
◎ものづくり立国の推進事業、石の道具と使い方講習山口県で開催

- 10月／第54回技能五輪全国大会、山形県で34組68名参加
 ◎造園映像教材のベストセラーである造園技法ビデオをDVDとして復刻、発売
 ◎庭づくり塾を新潟県で開催
 ◎ものづくり立国の推進進事業、竹の道具と使い方講習東京都で開催

■ 2017年(平成29年)

- 2月／第41回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、関西ブロックが「シダレウメ」を献木。スポーツジャーナリスト増田明美氏が特別講演
 ◎全国造園技能競技大会を継承して新たに中央職業能力開発協会主催の技能グランプリに造園職種が新設され、初めての大会が開催された。二人作業で15組が参加(静岡県)
 ◎「造園実習指導力向上研修会」(東京・三重の2会場)で開催
 3月／全国都市緑化よこはまフェア出展作庭研修会テーマ「大きな榎の木が見守る和モダンの庭」神奈川県支部はじめ近隣の支部から28名が参加
 ◎四季の安全リーフレット作成、配布
 ◎維持管理の請負制や緑化助成制度の調査報告書作成
 ◎ものづくり立国の推進事業、中堅技能者向けに、「庭づくりの技 石・竹・植栽の道具と使い方」を発行
 4月／庭の日の公開講座富山県
 ◎青年部主催の第1回軽トラガーデンコンテスト(富山県砺波チューリップ公園)
 ◎世界盆栽大会において、日本庭園の作庭実演(埼玉県スーパーアリーナ)
 5月／総会開催、新理事長に荻原博行氏
 ◎造園連新聞に掲載したコラムを編集し、千樹万幹コラム集を発行
 8月／造園シンポジウム(会場/新潟県三条市)。テーマは「いま、観光資源としての日本庭園を考える」
 ◎20歳未満の学生を対象とした若年者ものづくり競技大会に造園職種が新設され、初めての大会が開催(愛知県)
 10月／技能五輪国際大会、UAE・アブダビで開催。杉本・田村組が出場
 ◎37名の参加で技能五輪応援とドバイの造園視察
 ◎庭づくり塾福岡県で開催
 11月／第55回技能五輪全国大会、栃木県で52名が参加

■ 2018年(平成30年)

- 1月／次世代の指導者養成のための技能検定指導員養成研修会
 ◎海外日本庭園再生プロジェクト、アメリカ・カリフォルニア州グレンデール市ブランド公園内日本庭園、日本から7名の造園技能者が躰、滝石組、高木の剪定などを行う
 2月／第42回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、東海ブロック4支部が「ヤブツバキ」を献木。歌手八代亜紀氏が特別講演
 ◎「造園実習指導力向上研修会」(東京・三重の2会場)で開催
 5月／総会において、日本庭園士制度創設を決定
 ◎衛藤晟一参議院議員を顧問に委嘱
 ◎創立45周年記念式典において、組織功労者の表彰
 8月／若年者ものづくり競技大会(石川県)
 ◎造園シンポジウム(会場/東京都世田谷区)。テーマは「職人がつくった江戸・東京・Tokyo」
 ◎造園業の働き方改革を推進するための基礎資料となる組合員

実態調査 回収率30%

- 9月／全国都市緑化フェアやまぐちフェアにおいて、全国青年部が出展した庭園が国土交通大臣賞受賞
 10月／海外日本庭園再生プロジェクトアメリカ・ミズーリ州クラムブルックハウス・ガーデンの日本庭園の修復を造園技能者6名の参加で実施
 11月／第56回技能五輪全国大会、沖縄県で30組60名が参加

■ 2019年(平成31年)

- 1月／初めての日本庭園士補認定研修を東京都立園芸高校で開催。3日間の研修、学科試験などにより合格した32名の日本庭園士補が誕生
 ◎日本庭園技術のユネスコ世界無形文化遺産登録を目指して文化庁に要望
 2月／第43回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、北海道・東北ブロック7支部が「シダレザクラ」を献木、初めての試みで、講演会に代わり庭と緑の交流会
 ◎「造園実習指導力向上研修会」(東京・三重の2会場)で開催
 3月／委員を派遣した学生向けの「だれでもわかる安全な造園作業」テキストが完成
 ◎リスクアセスメント作業手順書維持管理編をホームページに掲載
 4月／ホームページリニューアル
 5月／文京区茗荷谷の荒廃した水戸家縁の占春園再生を筑波大学同窓会より委託され、伐採、石積み、竹垣、竹門、石段、躰などで日本庭園の一部再生を行った
 7月／若年者ものづくり競技大会(福岡県)
 8月／技能五輪国際大会、ロシア・カザンで開催。石坂・宇都宮組4位・敢闘賞に
 ◎21名の参加で、フィンランド・ロシアの海外造園事情視察研修
 9月／造園シンポジウム(会場/京都府京都市)。テーマは「映える!きょう(京)の庭」
 10月／海外日本庭園再生プロジェクト、アメリカ・テネシー州ナッシュビル松霧園の修復を造園技能者6名で実施
 11月／第57回技能五輪全国大会、愛知県で34名が参加
 ◎(公財)都市緑化機構主催緑の環境プラン大賞おもてなしの庭部門に応募し、審査の結果、大賞を受賞。港区芝公園に東京オリパラに向けたおもてなしの庭を作庭することが決定した。以後準備を行ったが、コロナ禍のため、1年延期となった

■ 2020年(令和2年)

- 1月／日本庭園士補認定研修を京都植物園などで開催。30名が日本庭園士補に認定された
 2月／第44回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、九州ブロック8支部が「玉之浦ツバキ」を献木
 ◎「造園実習指導力向上研修会」(東京・三重の2会場)で開催
 3月／建設キャリアアップ制度に対応するため、造園工事業の能力評価基準を策定
 ◎造園工事における高所安全作業標準マニュアルの暫定版を作成、支部に配布
 4月／新型コロナウイルスにより、緊急事態宣言、おもてなしの庭作庭延期、造園技能士前期試験は中止
 ◎造園連新聞オールカラーで月1回発行へ
 9月／造園シンポジウム(会場/オンライン)。テーマは「身近な緑の提案

現代の「市中の山居」

- 10月／ コロナ禍の中、関東ブロック青年部の企画により、初めてオンラインでセットメニュー講習「石組みの基本と応用」が開かれる
- 11月／ 第58回技能五輪全国大会、愛知県で無観客開催。19組38名が参加

■ 2021年(令和3年)

- 2月／ 第45回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、造園連本部三役が「カンツバキ」を献木
- 3月／ 初めてのオンライン講習日本庭園士補向けのステップアップ研修、進士五十八先生による「日本庭園の心と技」開催
- 4月／ 1年延期されていた東京都港区芝公園での「おもてなしの庭」作庭研修会が開催され、全国から1級造園技能士40名が参加、熟練技能者の指導の下、「はなやぎの庭」と「逍遥の庭」が完成。その模様はYouTubeで世界に発信した
- 5月／ 総会開催、新理事長に内海一富氏
◎芝公園おもてなしの庭完成披露式典
- 8月／ 若年者ものづくり競技大会(愛媛県)
- 9月／ 造園シンポジウム(会場/オンライン)。テーマは「災い転じて希望となす造園力」
- 10月／ 日本庭園士補認定研修東京で開催。31名が日本庭園士補として認定
◎造園用のフルハーネス型墜落制止用器具の開発を安全・保護用品のメーカー(株)TOWAと共同で行い、「ZOENフルハーネス」の予約販売を開始
◎日本庭園士ステップアップ研修として、オンラインセミナーを2回開催
- 11月／ 初めてのオンラインセミナー 進士五十八先生「日本庭園の技術とこころ」
- 12月／ 第59回技能五輪全国大会、東京都で23名が参加

■ 2022年(令和4年)

- 2月／ 第46回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、本部三役と関東ブロックの代表者が「カンツバキ」を献木。蔓延防止措置が解除された4月に関東ブロック青年部により手入れ奉仕を行った
◎オンラインセミナー 井上剛宏氏「日本庭園の技術とこころ」
- 3月／ オンラインセミナー 坂本利男氏、辰巳耕造・辰巳二郎氏
◎海外日本庭園再生プロジェクトの総括となる「グローバル時代の「日本庭園」を考えるシンポジウム」が京都市で開催され、アメリカでの日本庭園修復を報告
- 4月／ 若手造園技能者競技大会を全国都市緑化熊本フェアの街中会場内で開催
- 6月／ 初めての企画、日本庭園寺小屋塾開催、井上剛宏氏と戸田芳樹氏が講師となり、対面形式で全6回開催。参加者55名
◎海外日本庭園再生プロジェクト、アメリカハワイ州ヒロ市リリ・ウオカラニ公園日本庭園、造園技能者4名で、大津波で壊れた護岸と州浜の修復
◎オンラインセミナー 龍居竹之介氏「日本の庭こぼれ話」
- 7月／ 若年者ものづくり競技大会(広島県)
- 9月／ 造園シンポジウム(会場/オンライン)。テーマは「サステイナブルな造園を目指してI〜横浜の造園文化と技術」
◎オンラインセミナー 井上剛宏氏「日本庭園の技術とこころ〜その2〜」

- 10月／ 技能五輪国際大会エストニア・タリンで開催、浦辻・中野組が海外開催で初の銀賞

- 11月／ 第60回技能五輪全国大会、東京都で24名が参加

■ 2023年(令和5年)

- 1月／ オンラインセミナー 栗野隆氏、平井孝幸氏「雑木の庭」
- 2月／ 「造園実習指導力向上研修会」(東京)で開催
◎日本庭園士補認定研修会を京都梅小路公園緑の館などで開催。17名が日本庭園士に認定される
◎日本庭園士ステップアップ研修都立園芸高校で開催
◎オンラインセミナー 海外で活躍する若手 山口陽介氏・猪鼻一帆氏「仲間との協働」
- 3月／ 第47回造園感謝祭(伊勢神宮奉納行事)、四国ブロックが当番となり、カンツバキを献木
◎日本庭園士ステップアップ研修奈良県立磯城野高校で開催



造園連開発のフルハーネス型墜落制止用器具を2022年総会席上で安全使用について説明



あとがき

ここに、創立50周年記念誌「伝統の継承と創造～技と人をつないで～庭～未来へ～」を発行し、全組合員に配布する運びとなりました。令和4年3月創立50周年記念事業部会(のちに実行委員会)をオンラインで開催し、デジタル時代に合わせ、創立50周年の歩みの詳細はウェブに掲載することとし、記念式典当日に配布する最近10年間の主な事業をまとめた冊子を配布版として印刷発行することとなりました。

おもてなしの庭や海外日本庭園の再生プロジェクト、全国都市緑化フェアでの庭園出展などの事業を写真で構成し、各界15名の方にコラムを寄稿して

いただきました。伝統を継承しつつ、創造する精神で新しい時代に対応してきた造園連の事業をコンパクトにまとめたものですので、皆様にご活用いただけたら幸いです。

お忙しい中寄稿をお寄せいただいた皆様、編集企画をお願いした(株)マルモ出版の小林様には時間のない中、編集作業にご協力いただきありがとうございました。創立50周年を機会に、新たな時代へと常に創造する心で、全国の組合員をつなぐ冊子となることを願っております。

令和5年5月
創立50周年記念事業実行委員会

〈企画・編集〉

[創立50周年記念事業実行委員会]

【委員長】

米川道雄

【委員】

内海一富、川合宏治、井上花子、金城健太郎

[令和3・4年度役員]

【理事長】

内海一富

【副理事長】

高木生一、阪口昌行、寺石隆一

【常務理事】

大平 晶、笠原次巳、米川道雄、大場二郎

【理事】

磯野進吾、橋本正男、川合宏治、酒井博之、宗景 昭、平岡文典、杉山光男、山本辰雄、丹重裕壮、小島裕史、金藤 晃、弥永重俊、萩生田國弘、天本良光、塩原 健、土井茂人、佐久間洋、槇野浩二郎、三浦利吏、坂本利男、高野 徹、八戸 昇

【監事】

鈴木 誠、木暮幸一

【事務局】

内田光一郎、三浦美香、植田瑠依子、服部 淳、落合友樹、岩間 陽

創立 50 周年記念誌
伝統の継承と創造
技と人をつないで～庭～未来へ

2023 年 5 月 25 日発行

発行／一般社団法人日本造園組合連合会

制作／株式会社マルモ出版

印刷・製本／株式会社ローヤル企画

50th Anniversary memorial Booklet
Japan Federation of Landscape Contractors
since 1973

